

さぶりめんと

2018-Dec

No. 47

お母さんと赤ちゃんの命を守るために

産婦人科 後藤 摩耶子

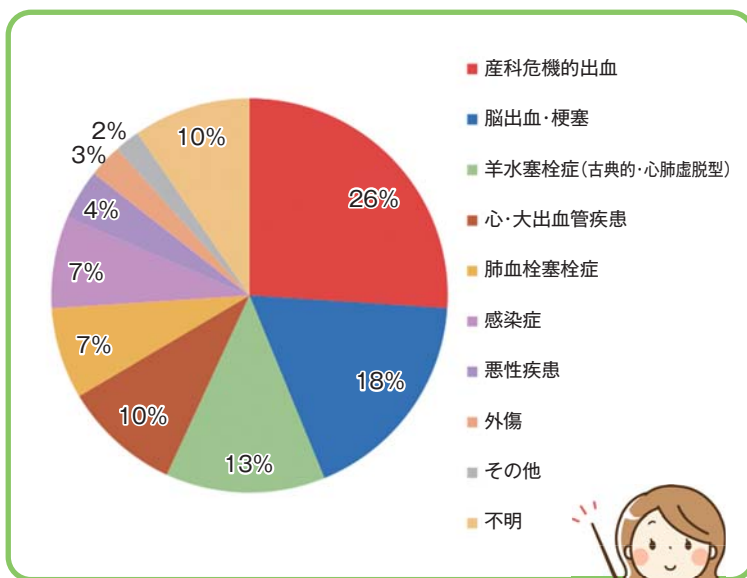
お産の危険性

妊娠は病気ではありません。しかし妊娠すると女性の身体は劇的に変化し、つわりから始まる様々な症状を経験することがあります。また晩婚化、高齢出産が増える近年では加齢に伴い、合併症が増加してきているのも事実です。一昔前までは「産後の肥立ちが悪くて」と命を落とされる方も少なくない時代でしたが、近年ではそのような妊産婦さんは非常に稀であり、日本の妊産婦死亡率は約1/20000とされています。しかし減少傾向とはいえ、今日でも全国で年間40例の妊産婦死亡が報告されています。

当院では年間300件以上の分娩を取り扱っております。そのなかで年間少数ではありますが、命に関わるような重症の妊産婦さんもいらっしゃいます。

命に関わる合併症って？

どんなに気をつけていてもある一定の確率で合併症は起こります。日本では、妊産婦さんが亡くなる原因で一番多いのは出血で、全体の約1/4を占めています。その他にも脳出血や羊水塞栓など様々な原因があります。(右グラフ参照)



(グラフ：日本の妊産婦死亡の原因)

安全なお産をより安全なものとするために
～母体救命講習会～

当院では母体救命のインストラクターが産婦人科に2名、救急科に1名在籍しています。また、最重症妊婦に対応するため、日本産婦人科学会が公認する母体救命講習会を開催し、最新の知識やガイドラインを定期的にブラッシュアップし、日々精進しております。もしものことが起こっても対応できるよう、万全の体制で皆様のお産をサポートして参ります。



(母体救命講習会の様子)

関西ろうさい病院の理念

●● 良質な医療を働く人々に、地域の人々に、そして世界の人々のために ●●

病院運営の基本方針

- ・私たちは、働く人々の健康確保のための医療活動、即ち「勤労者医療」中核的役割を担ってこれを推進します。
- ・私たちは、急性期医療機関として良質で安全・高度な医療の提供を行うとともに、地域の諸機関と連携して地域医療の充実を図り「地域に生き、社会に応える病院」としての発展を目指します。
- ・私たちは、患者さんの権利を尊重し、医療の質の向上ならびに患者サービスの充実に励み、「信頼され、親しまれる病院」作りを心がけます。
- ・私たちは、「開かれた皆様の病院」として、ボランティアや有志の方々の病院運営への参加・協力を歓迎します。
- ・私たちは、病院使命の効果的な実現のために「働き甲斐のある職場」作りを行い、運営の効率化と経営の合理化を推進します。

イメージキャラクター
かんろっこ

さぶりめんと

2018-Dec

No. 47

胃がんの内視鏡診断

消化器内科

山口 真二郎

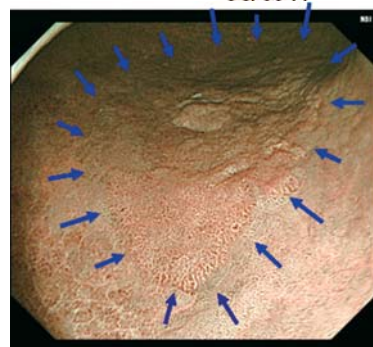
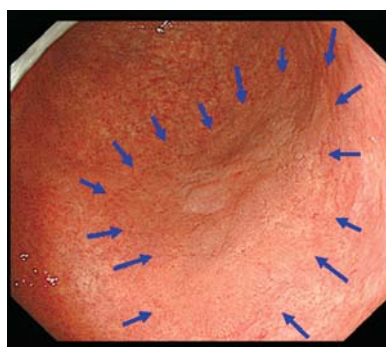
日本に多い胃がん

胃がんは患者数で大腸がんに次いで2位、死亡者数で肺がん、大腸がんに次いで3位と日本では非常に多いがんです。胃がん患者さんの99%がピロリ菌に感染していると言われており、胃がんにならないためには薬でピロリ菌を除去することが重要です。また、胃がんの切除には内視鏡治療と外科治療がありますが、外科治療はお腹を切るので、身体への負担が大きくなります。一方、早期のうちに発見できれば負担が少なく回復も早い内視鏡治療を行うことが可能となります。



進歩する内視鏡診断 —NBIと拡大内視鏡—

現在の技術では、上部消化管内視鏡は高画質な電子画像での撮像ができ、わずかな陥凹や色調の違いを認識して胃がんを早期に発見することが可能です。しかし、胃がんは胃炎を伴うことが多く、発見が難しい病変も存在します。最近では、狭帯域光観察(NBI)といって特殊なフィルターにより2つの短い波長の光を胃の表面の粘膜にあてることで、粘膜の細かい表面模様や微小血管を明瞭に映すことができるようになっています。通常内視鏡では病変は認識しにくいですが(図1(左))、手元のボタン一つで病変の認識が容易になります(図1(右))。また、拡大内視鏡(図2)は手元のレバーを調整することで85倍まで拡大できる内視鏡です。拡大された表面模様や微小血管の形態が崩れていれば“がん”と診断でき、NBIと併用することでさらに明瞭に見えます。図3(左)のわずかに陥凹した病変は通常内視鏡では“がん”と診断することは困難ですが、NBIを併用した拡大観察(図3(右))では陥凹内に茶色の崩れた微小血管を認め、生検しなくても“がん”と診断することが可能です。



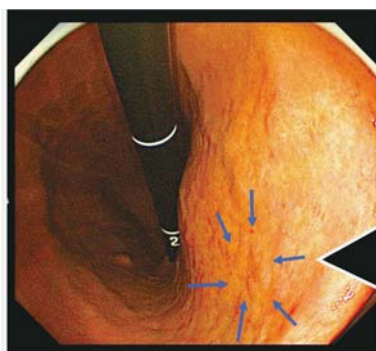
(図1) 狭帯域光観察(NBI) “がん”は茶色、周囲の正常粘膜は緑色



↑ NBIボタンを押すと…



拡大用レバーを調整すると… ↓



(図3) 拡大内視鏡観察 85倍までの拡大観察が可能

(図2) 拡大内視鏡



胃がんの内視鏡診断・治療は日々進歩しております。胃がんが見つかったとしても早期の段階であれば、より負担の少ない内視鏡での治療が可能です。早期発見、早期治療のためには定期的に上部消化管内視鏡検査を受けられることをおすすめします。ご不明な点は、消化器内科専門医までお気軽にご相談ください。